

私と税金と公務員と

稚内市立稚内中学校 1年 安斉 暖留

新型コロナウイルスが流行した頃、患者を診察・治療をしてきていた医療従事者は、誰のお金から給料をもらっているのか、気になったことがあった。そこで、タブレットで調べてみたところ、医療従事者に限らず、警察官・裁判官・自衛隊・消防士・教員等の公務員と呼ばれる人達は、私達が払っている税金から給料が出ていることを知った。そこから、「公務員と税金」というものに関心をもつようになった。

例えば、自宅が火事になった時、消防士が消火活動の費用を請求したらどうだろう。そんな絶望しているときに、お金を請求されたらどんな感情を抱くのだろうか。なんて、考えたことがあった。だが、こんな事、考える必要は全くない。何故なら、消防士が無償で助けてくれるのは、この世の当たり前だからだ。警察官だって、当たり前かのように無償で助けてくれている。この事実だけで考えると、公務員の人達には感謝してもらえないだろう。

だが、そんな無償で働いてくれている人達に私達は、一方的に助けられているのだろうか。

そうではないと私は思う。私達が、公務員を税金で支え、税金で支えられた公務員は、私達の生活を支える。これは公務員との関係に限ったものではない。公共施設も税金で作られているものだし、あらゆる教材も税金で賄われている。また、道路や、図書館もその一つで、私や、誰かが払った税金、その集まりが自分のため、みんなのためにと、形になっている。こうやって、人と人は支え合って生きている。

つまり、このサイクルはみんなを繋げる「輪」になっている。そしてその「輪」を税金は、回り続ける。

しかし、この支え合いがどこかで、絶えてしまったら、意味がない。だからこそ、税金に助けてもらった人が、「自分も税金を払っているから」等の気持ちで、そのことを当たり前だとは思ってはならないと考える。

税金で助けられたことに感謝し、税金で他の人の助けになっていく。そうして、次の人へ、次の人へ、と紡がなければならぬと、私は感じる。そして、税金をみんなが理解してこそ、支え合いがめぐり続ける社会の「輪」が生まれると考える。また、「輪」は、一度生まれたら永久に続くという訳ではないということも忘れてはならない。

私は信じている。

私が払ったこの税金で誰かを支えていることを。

誰かが払った税金で私が支えられていることを。